

中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」

中 島 喜代子

The Junior High-School Students' View of the Children's Place, compared with the University Students' View of it

Kiyoko NAKAJIMA

1. はじめに

現代の子ども達は、学校、家庭、地域のそれぞれの場所において、様々な多くのストレスを感じている。そのため、不登校や傷害事件、いじめ、非行などの問題行動や、鬱病、自律神経失調症などの心身症を引き起こしている。また、人間関係の構築をうまくできない子どもが増えている現状がある。こうした状況においては、子どもが「居場所」をもつことが非常に重要な意味をもつと考えられる。

「居場所」という言葉は、1980年代から使われ始めている。「居場所」がタイトルに使われている著書では、当初子どもや父親、女、老人など扱われている対象が多様であるが、1990年代半ば以降より子どもや若者が多くみられるようになっている。¹⁾「居場所」に含まれる意味内容には、物理的側面とともに心理的側面がある。心理的「居場所」を示す意味内容として、安心できる場所、自分を自由に表現できる場所、自分を必要とし価値観を共有できる仲間がいる場所、ストレスや大人の目から回避できる場所など多くの側面をもっている。しかし、これらは大きく二つに大別できると考えられる。一つは他人からの監視・干渉を避け、精神的な疲れを回復し、自分を取り戻す場所、すなわち逃避・回復の場所である。他の一つは自分を確認し、自由に自分を表現できる場所、安心して人や社会との関係性をもてる場所である。前者は、プライバシーと関連し、後者はコミュニケーションと関連している。コミュニケーションは、人・モノ・自分の内面とのコミュニケーションを含むものである。このように、「居場所」には、逃避・回復できるプライバシーを保障する場所という側面（私的居場所）と、自由に安心し

てコミュニケーションできる場所（公的居場所）という二つの側面があるといえる。

本研究では、前述の「私的居場所」の中心となる子ども部屋について、その実態と考え方を年齢の異なる中学生と大学生間で比較検討し、発達段階を軸として子ども部屋の「居場所」としての意味を探ることを目的とする。

これまで、子ども部屋に関する研究は1980年代から多く行われているが、それらは主に子ども部屋の閉じこもりを問題ととらえる研究²⁾と、自立やプライバシー確保にとっての必要性の視点からの研究³⁾である。子どもの居場所としての視点をもった研究⁴⁾は、ここ1~2年で登場し始めた段階である。それらは、中・高校生を対象としたものであり、本研究では中学生と大学生を比較することで「居場所」の意味は、より多面的にとらえることが可能であると考えられる。

2. 研究方法と調査対象の概要

1) 研究方法

本研究では、子どもの「私的居場所」の中心となる子ども部屋について、発達段階の比較検討を行うことによって、子ども部屋の「居場所」としての意味内容を捉えるため、中学生と大学生およびその保護者を対象として調査を実施した。

中学生は、三重県松阪市のN中学の1年生全員を対象とし、学校を通じて配布・回収する方法で調査を実施した。調査時期は、平成13年10月である。大学生は三重大学の自宅生を対象として個別に配布・回収する方法で調査を実施した。調査時期は、平成13年11月である。

調査の結果、中学生90、大学生85の有効サンプルを得た。調査対象数、学年、性別、保護者の

記入者を、表1~4に示す。

2) 調査対象の概要

調査対象の概要を、表5に示す。住宅条件では、両対象とも一戸建ての持ち家で専用住宅が殆どである。居住地域では、両対象とも住宅地が最も多く農業地が続いているが、やや中学生の対象の方が農業地の占める割合が多くなっている。住宅の広さは、いずれも30坪~40坪、4~6室にピークがあり、平均室数は約6室となっている。

家族条件では、家族型は核家族と拡大家族の割合が中学生ではほぼ同程度であるが、大学生では核家族が約7割となっており、大学生の方が核家

表1 調査対象数

	中学生	大学生	全 体
配布数	155	168	323
回収数	92	90	182
有効数	90	85	175

表2 学 年

学 年	件 数	(%)
中学1年生	90	51.4
大学1年生	23	13.1
大学2年生	18	10.3
大学3年生	23	13.1
大学4年生	17	9.7
大学院生	4	2.3
全 体	175	100.0

表3 性 別

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
男	48	53.3	21	24.7	69	39.4
女	42	46.7	64	75.3	106	60.6
全体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

表4 保護者記入者

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
父	3	3.9	5	6.8	8	5.3
母	73	94.8	69	93.2	142	94.0
祖父	0	0.0	0	0.0	0	0.0
祖母	1	1.3	0	0.0	1	0.7
無回答	13	-	11	-	24	-
全体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

族は多い。したがって、家族人数でも違いがあり、中学生の方が家族人数は多くなっている。子どもの数はいずれも約2人であるが、中学生の方がやや多い傾向がみられる。父母の年齢はいずれについても両対象間で8歳の開きがあり、対象全体では父親の平均年齢は47才、母親は44才である。

3. 調査結果と考察

1) 子ども部屋の実態

a. ハード面の実態

子ども部屋の所有形態を、図1に示す。中学生・大学生ともに所有率は9割を越えているが、大学生では専用個室がほとんどを占めるのに対し、中学生では共有の子ども部屋が相対的に多く、違いがみられる。

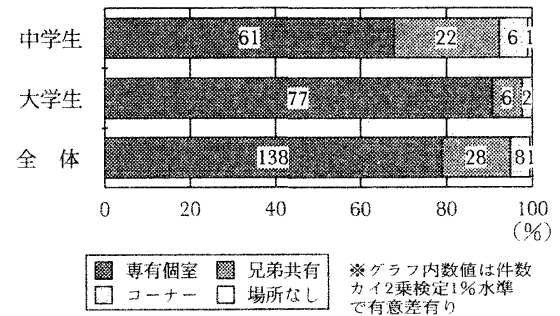


図1 子ども部屋の所有形態

子ども部屋の位置については、①階数、②玄関からの位置、③居間や食事室からの位置、④両親の寝室からの位置の4つの側面からとらえた結果を、図2に示す。中学生・大学生ともに、階数は2階が多く、玄関から他の部屋を通らずに直接行ける位置にあり、居間や食事室から離れた位置で、両親の寝室からは近い位置にあることが多い。しかし、大学生の方が子ども部屋の隔離度や独立性はやや高くなっている。

その他の子ども部屋の実態について、図3~7に示す。子ども部屋は洋室が約8割、広さは6畳が多く、入り口はドアが約8割となっており、鍵は約1割についている。入り口は約7割が閉めた状態で使用している。これらについては、年齢段階による違いはほとんどみられない。

b. 子ども部屋の使用実態

子ども部屋で行う行為について、図8に示す。「友達をよぶ」行為を除いたすべての行為について、中学生よりも大学生のほうが子ども部屋でより多くの行為を行っている。特に、「考え事・悩

中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」

表5 調査対象の概要

地 域	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
住宅地	57	64.8	62	73.8	119	69.2
商業地	0	0.0	4	4.8	4	2.3
工業地	0	0.0	1	1.2	1	0.6
住・商・工混合地	3	3.4	2	2.4	5	2.9
農業地	28	31.8	15	17.9	43	25.0
無回答	2	-	1	-	3	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

所有関係

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
注文住宅	63	75.0	57	68.7	120	71.9
建売住宅	13	15.5	19	22.9	32	19.2
分譲マンション	0	0.0	2	2.4	2	1.2
公団・公社・賃貸住宅	3	3.6	1	1.2	4	2.4
公営住宅（借家）	0	0.0	1	1.2	1	0.6
民間借家	3	3.6	2	2.4	5	3.0
給与住宅	2	2.4	1	1.2	3	1.8
無回答	6	-	2	-	8	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

住宅形式

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
一戸建て	81	93.1	78	92.9	159	93.0
連続建て	1	1.1	2	2.4	3	1.8
共同建て	5	5.7	4	4.8	9	5.3
無回答	3	-	1	-	4	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

住宅様式

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
農林漁家	10	11.5	4	4.8	14	8.2
専用住宅	73	83.9	76	90.5	149	87.1
工場併用住宅	0	0.0	1	1.2	1	0.6
店舗併用住宅	3	3.4	3	3.6	6	3.5
その他	1	1.1	0	0	1	0.6
無回答	3	-	1	-	4	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

広 さ

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
20坪未満	4	4.7	2	2.5	6	3.6
20~30坪未満	6	7.0	15	18.5	21	12.6
30~40坪未満	28	32.6	27	33.3	55	32.9
40~50坪未満	12	14.0	12	14.8	24	14.4
50~60坪未満	13	15.1	7	8.6	20	12.0
60~70坪未満	5	5.8	9	11.1	14	8.4
70坪以上	18	20.9	9	11.1	27	16.2
無回答	4	-	4	-	8	-
全 体	90	100.0	81	100.0	167	100.0

室数（L・D・Kを除く）

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
1~3室	10	11.4	14	16.7	24	14.0
4~6室	46	52.9	46	54.7	92	53.8
7~9室	24	27.5	14	16.7	38	22.2
10~12室	6	6.8	5	6.0	11	6.4
13~16室	1	1.1	5	6.0	6	3.6
無回答	3	-	1	-	4	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0
平均室数	5.85室		5.82室		5.84室	

父の年齢

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
30歳~40歳未満	20	25.0	0	0.0	20	13.0
40歳~50歳未満	57	71.3	21	26.3	78	48.8
50歳~60歳未満	3	3.8	56	70.0	59	36.9
60歳~70歳未満	0	0.0	3	3.8	3	1.9
非該当	6	-	4	-	10	-
無回答	4	-	1	-	5	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0
平均年齢	43.2歳		51.3歳		47.2歳	

母の年齢

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
30歳未満	1	1.2	0	0.0	1	0.6
30歳~40歳未満	31	36.5	0	0.0	31	37.4
40歳~50歳未満	53	62.4	51	61.4	104	59.4
50歳~60歳未満	0	0.0	31	37.3	31	17.7
60歳~70歳未満	0	0.0	1	1.2	1	0.6
非該当	1	-	0	-	1	-
無回答	4	-	2	-	3	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0
平均年齢	40.5歳		48.1歳		44.1歳	

家族人数

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
2人	1	1.2	4	4.8	5	2.9
3人	6	7.0	1	13.1	17	10.0
4人	29	33.7	36	42.9	65	38.2
5人	24	27.9	16	19.0	40	23.5
6人	17	19.8	9	10.7	26	15.3
7人	7	8.1	8	9.5	15	8.8
8人	2	2.3	0	0.0	2	1.2
無回答	4	-	1	-	5	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0
平均家族人数	4.94人		4.43人		4.69人	

子どもの数

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
1人	8	9.3	16	19.3	24	14.2
2人	53	61.6	49	59.0	102	60.4
3人	22	25.6	17	20.5	39	23.1
4人	2	2.3	1	1.2	3	1.8
5人	1	1.2	0	0.0	1	0.6
無回答	4	-	2	-	6	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0
平均子ども人数	2.26人		2.04人		2.14人	

家族型

	中学生		大学生		全 体	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
核家族	47	54.0	57	67.1	104	60.5
拡大家族	40	46.0	28	32.9	68	39.5
無回答	3	-	5	-	8	-
全 体	90	100.0	85	100.0	175	100.0

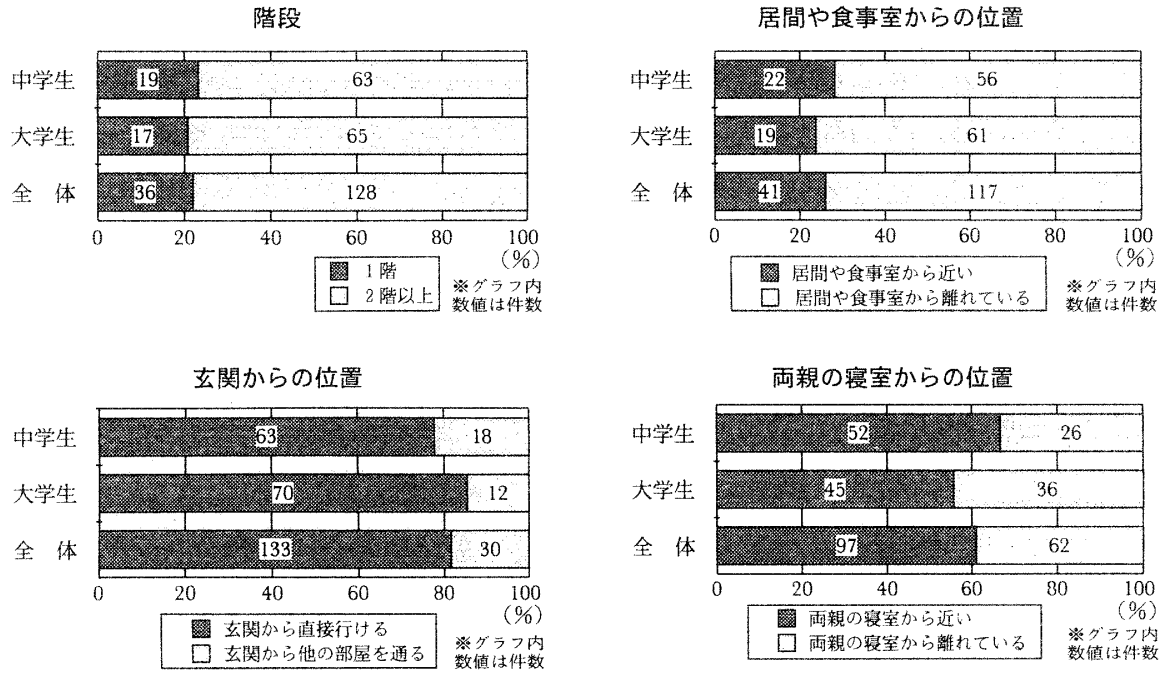


図2 子ども部屋の位置

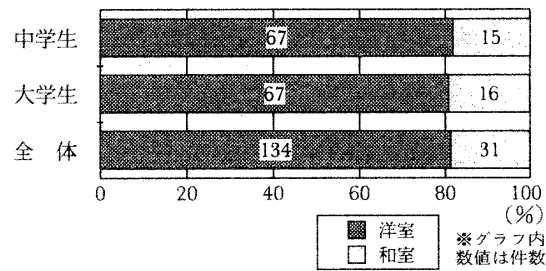


図3 子ども部屋の様式

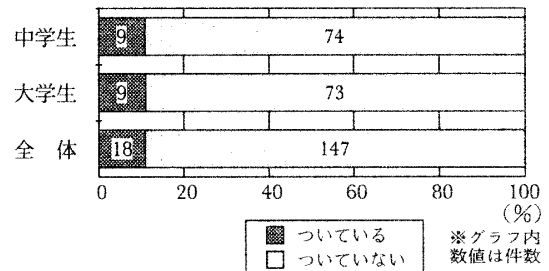


図6 鍵の有無

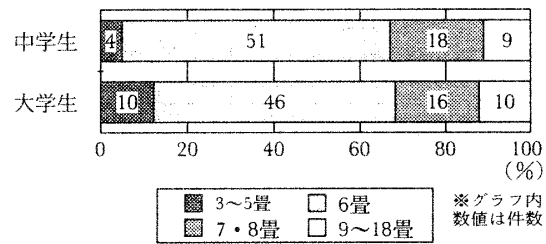


図4 子どもの部屋の広さ

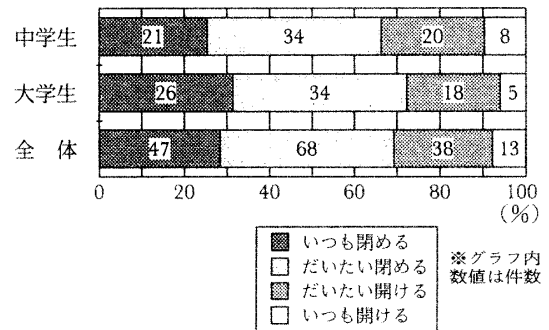


図7 入り口の開閉状態

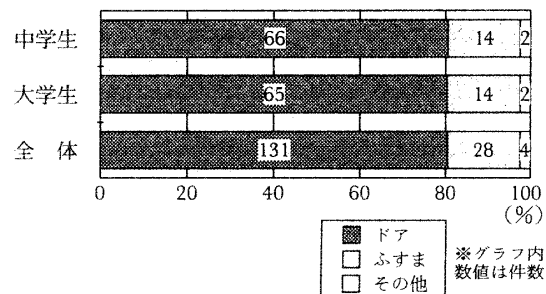
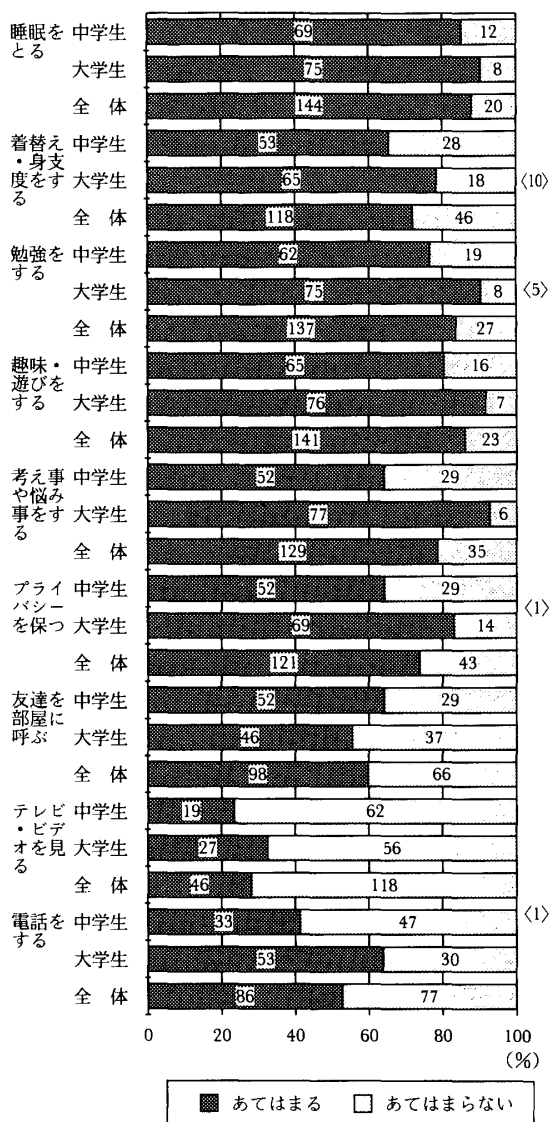


図5 入り口の状況

中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」



※グラフ内数値は件数
()内はカイ2乗検定の有意差水準

図8 子ども部屋の使用実態

み事」「プライバシーを守る」「電話」のような精神的なプライバシーにかかわる行為についてはその違いが大きく、大学生の方が子ども部屋をより活用しており、精神的な拠点、「私的居場所」としての意味も大きいと考えられる。

子ども部屋に置かれているモノについて、図9に示す。学習用品については、勉強机や本棚は中学生・大学生ともに8割程度配置されており年齢段階による違いはないが、パソコンでは大きな差がみられ大学生の配置割合が高い。パソコンの普及はまだ一般化されるにはいたっていないといえ、家族も使用する傾向がみられる。趣味・娯楽用品

については、ステレオ以外のモノの配置割合は全体的に低い。しかし、テレビはもともと家族の共用品であったことを考えると、パーソナル化がかなり進んでいるといえる。年齢段階別にみると、テレビ、ビデオ、ステレオでは大学生の配置割合が高く、テレビゲームでは中学生の配置割合が高くなっており趣味・娯楽生活の違いが現れている。また、テレビ、ビデオでは中学生の方に家族も使用する割合が高く、子ども部屋へのモノの侵入があるといえよう。設備用品については、全体的に「エアコン」「扇風機」の配置率が高く居住環境はかなり整っていると考えられる。「固定電話」の配置率も2割程度あり、電話のパーソナル化も進んでいる。年齢段階別にみると、多くの設備についてその配置率は大学生のほうが高くなっており、特に「エアコン」「携帯電話」では差が大きい。したがって、設備の面でも大学生の子ども部屋の方が居住環境がよいといえる。

子ども部屋への人の出入りについて、図10~13に示す。子どもが在室時の親の出入りについては、「出入りしない」ケースはほとんどなく、年齢段階別にみると「毎日出入りする」割合は中学生のほうが多くなっており、親の関与度が強い。また、その際の出入りの仕方は「自由に入る」と「ロックなどをして入る」に2分されており、年齢段階別にみると中学生の親の方が自由に出入りしている。子ども部屋に入るケースについてみると、全体的に「趣味・遊び」「勉強」時の出入りは多く、「考え事・悩み事」「友人が来ているとき」の出入りは少なくなっており、親は子どものプライバシーに一定の配慮をしていると考えられる。年齢段階別にみると、どのケースについても中学生の親の方が出入りする割合が高く、大学生のほうがプライバシーは守られているといえる。さらに、親が子供部屋に出入りする理由についてみると、全体的に「子どもと話す」ために入ってくるケースが最も多く約8割で、その他の管理・監視にかかわるケースは5~6割程度である。年齢段階別にみると、どのケースでも中学生の親の方が多く出入りしているが、特に「様子を見る」という理由では差が大きく、中学生の親の方が子どもに対する関与の必要性を強く感じているといえる。

子ども部屋の管理実態について、図14に示す。全体的に、図に示した5つの管理行為のうち、「ポスター等の飾りつけ」を除く行為については、

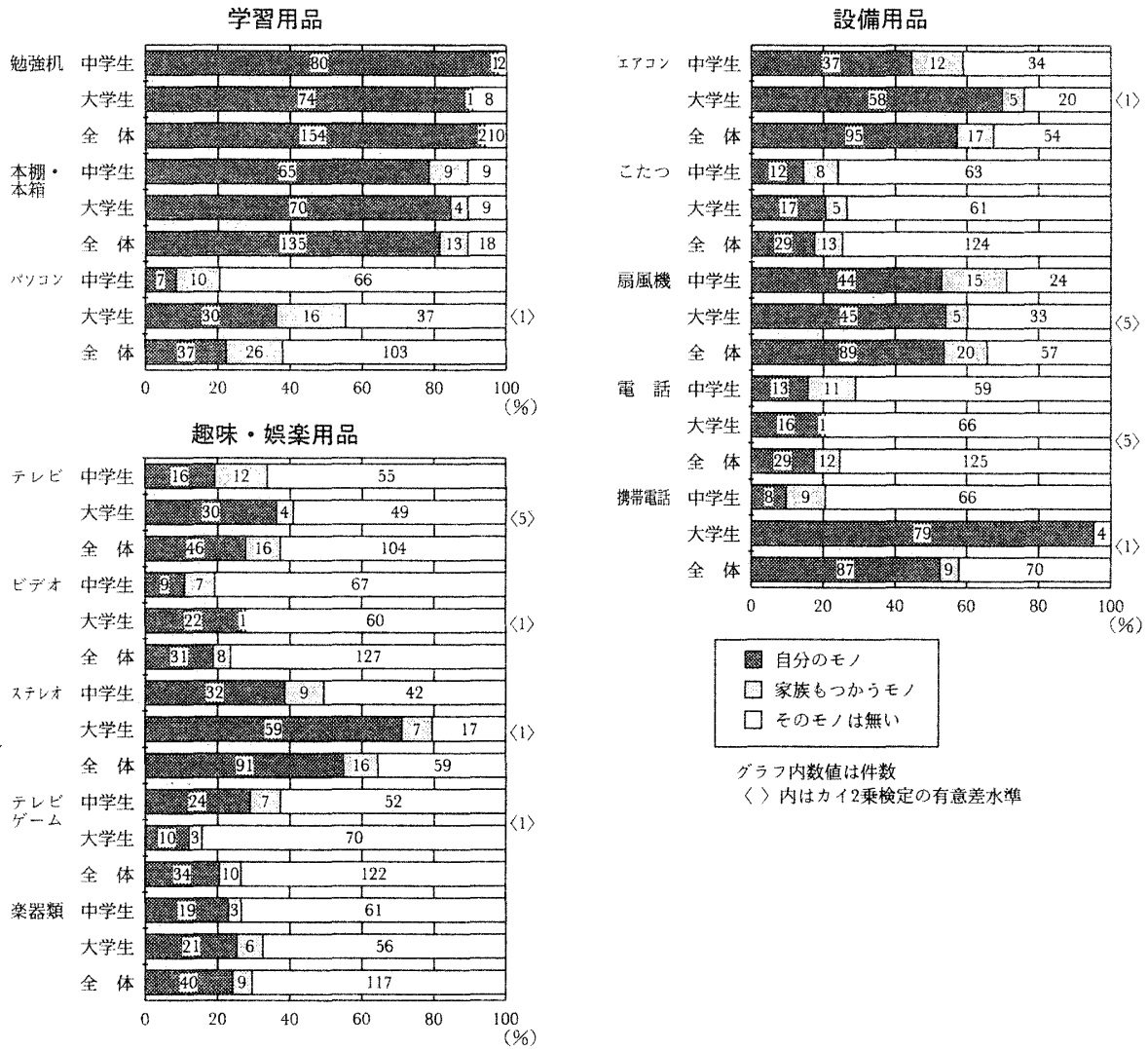


図9 子ども部屋に配置されているもの

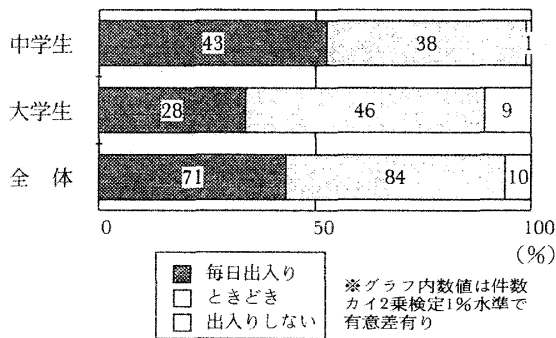


図10 在室時の親の出入り

6割程度の親が関わっており、親の関与度は強い。年齢段階別にみると、親の関与度の強い管理行為すべてにおいて、2~4割程度中学生の親の方が多く管理しており、中学生は子ども部屋の管理をかなり親に依存している実態が明らかになった。

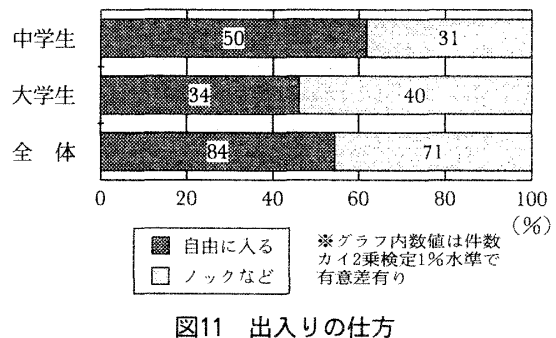


図11 出入りの仕方

しかし、大学生についても、親に管理を依存しているケースは少ないとはいえない。

2) 家庭内における子どもの空間使用実態と意識
 本項では、住宅内で行為を行う場所や使用実態

中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」

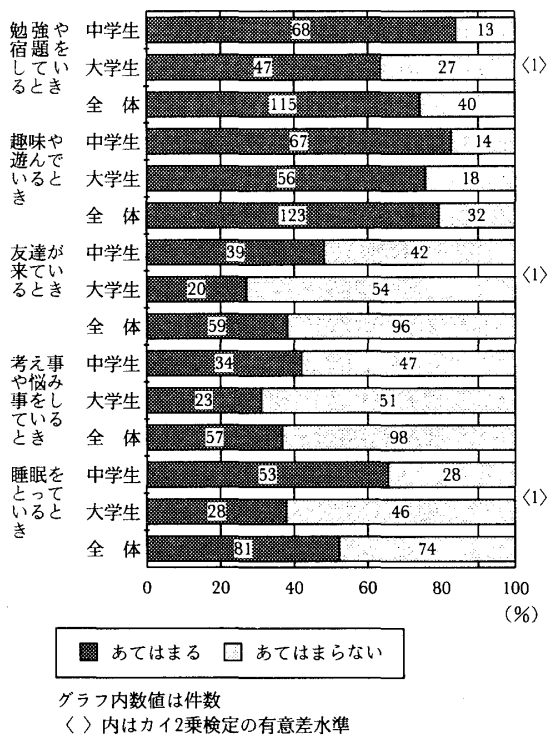


図12 子ども部屋に入るケース

およびプライバシーに対する考え方等について検討することにより、子どもにとっての「居場所」の意味を探る。

17の行為について子どもが住宅内で行う場所を、図15に示す。全体的に、「睡眠」「手紙を書く」「悩み事・考え事をする」等のプライバシーを要する行為は、子ども部屋で行われていることが多く、また「勉強」「読書」「音楽・ラジオを聴く」等の集中力や静かさを必要とする行為についても子ども部屋での行為率が高くなっている。年齢段階別にみると、子ども部屋で行うことの多い行為については、大学生の方が子ども部屋で行うことが多い傾向が顕著にみられ、プライバシーを守る、熱中して物事に取り組むという効果を、大学生の方がより多く子ども部屋に求めていることが明らかになった。

普段よくいる部屋について、図16に示す。年齢段階で大きな違いがあり、中学生は居間にいることが多く、大学生は子ども部屋にいることが多いことがとらえられた。

一人になりたいと思う頻度について、図17に示す。どの年齢段階においても、一人になりたいと思う者の方が多いが、大学生の方がより多く感じていることが明らかになった。

家族間のプライバシーの必要性について、図

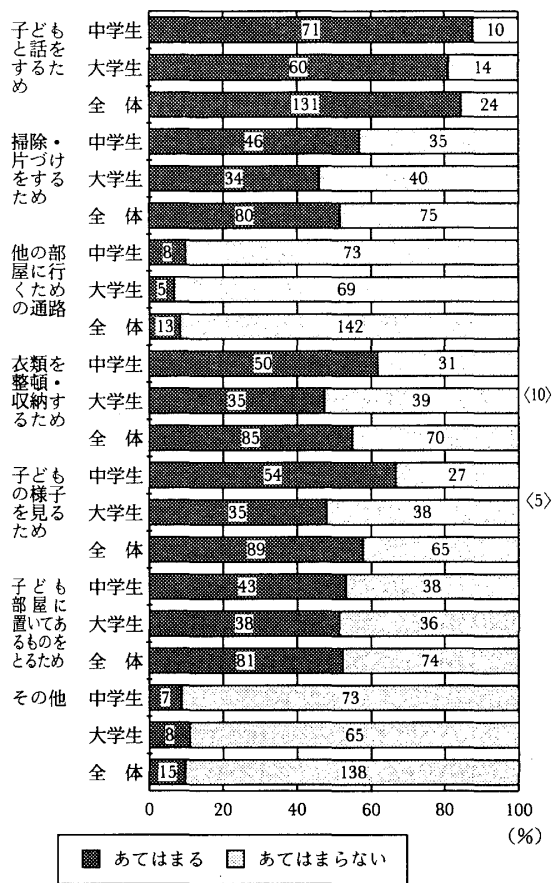


図13 子どもの在室時の出入りの理由

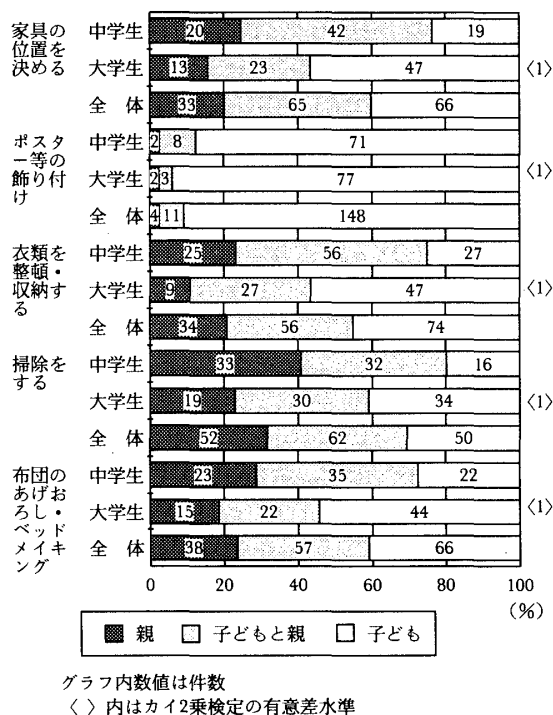


図14 子ども部屋の管理状況

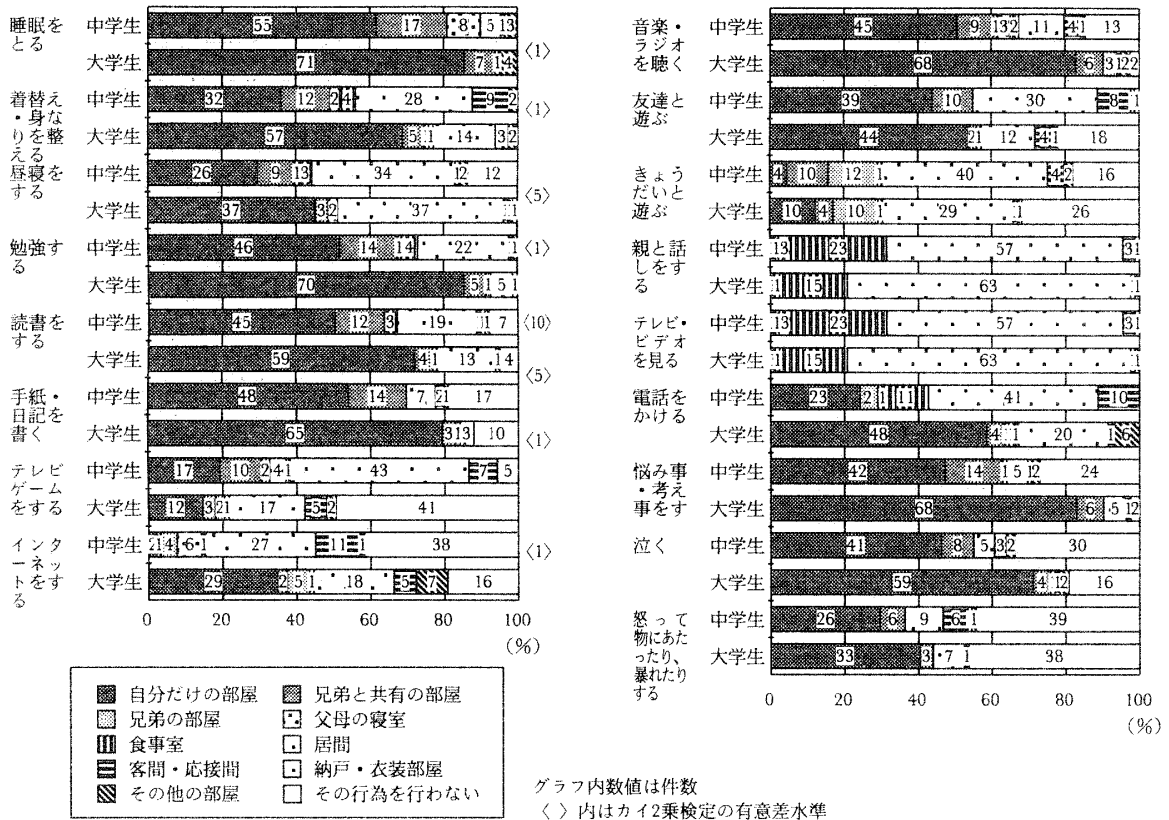


図15 行為の場所

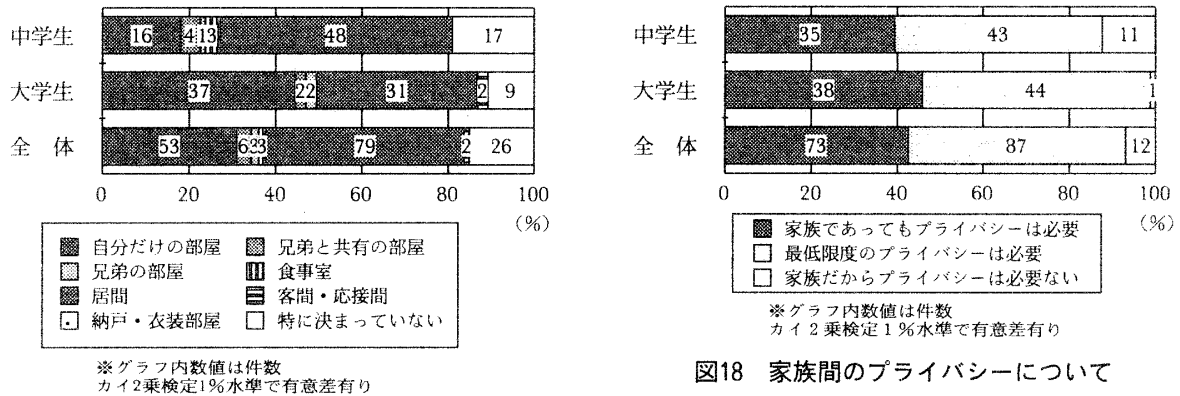


図16 普段よくいる部屋

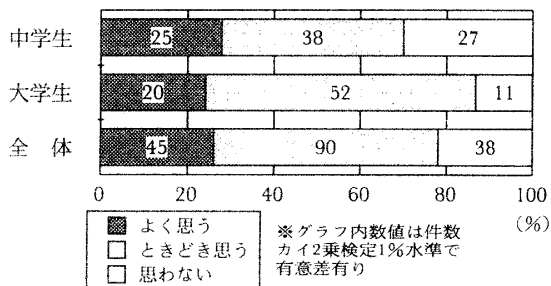


図17 一人になりたいと思う頻度

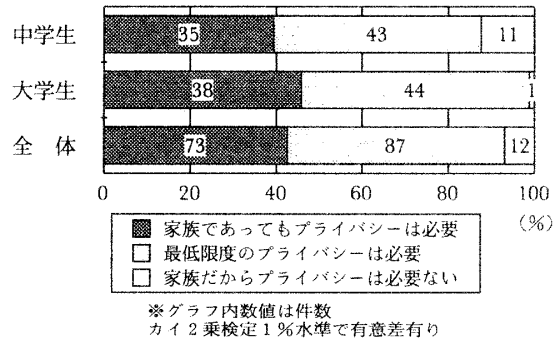


図18 家族間のプライバシーについて

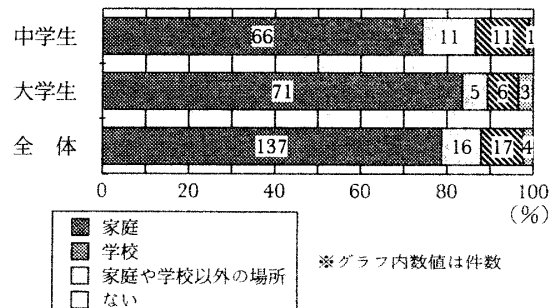


図19 居心地のよい場所

中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」

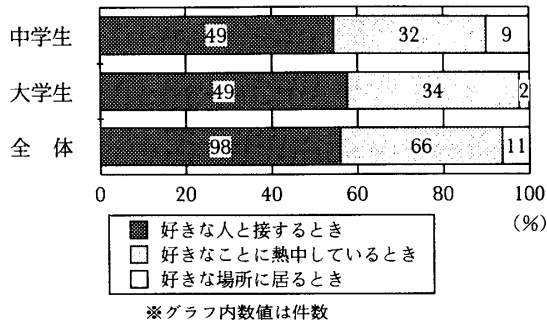


図20 好きな時間

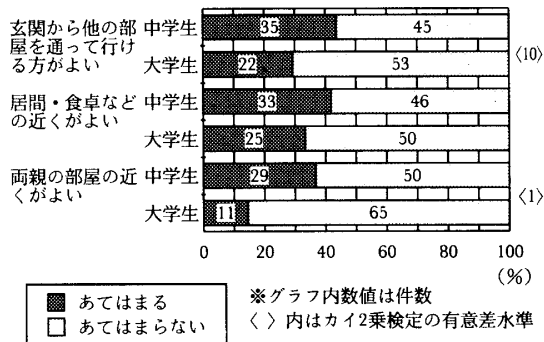


図21 子ども部屋の位置の希望

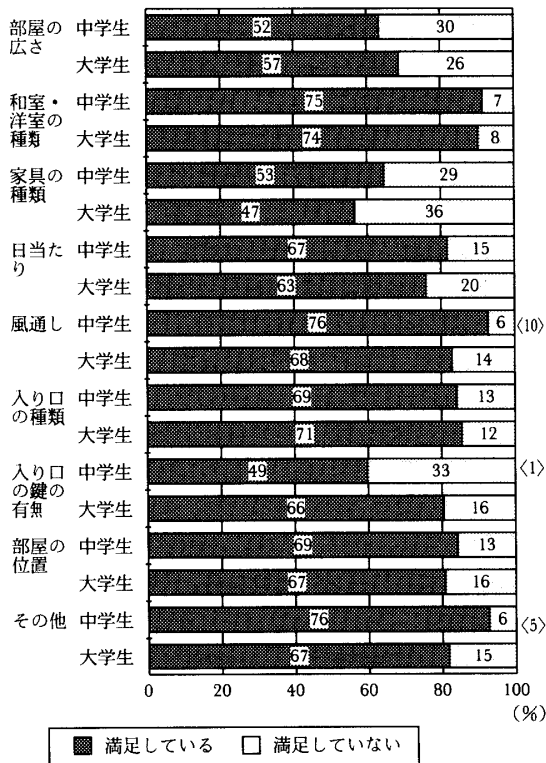


図22 部屋に対する不満

18に示す。ほとんどの子どもはプライバシーの必要性を感じているが、大学生の方が必要性を感じるものが多い。

居心地がよいと思う場所について、図19に示す。どの年齢段階においても家庭がもっとも居心地のよい場所と感じているが、中学生の方がややその割合が低く、家庭に不満を感じているものが多いと考えられる。

好きな時間について、図20に示す。どの年齢段階においても「好きな人と接するとき」が最も多く「好きな場所にいるとき」は、ほとんどみられない。したがって、子どもの「居場所」を決める要因は、場所そのものよりもそこにいる人間関係の影響が大きいと考えられる。

3) 子ども部屋に対する意識

本項では、年齢段階別に子ども部屋に対する考え方を検討することにより、子どもにとっての「居場所」の意味を探る。

子ども部屋の位置の希望について、図21に示す。玄関からの位置、居間・食事室からの位置については、現在の実態よりも玄関から直接行ける位置や居間・食事室から遠い位置を希望しているものは少なく、家族の目から逃避しようとする姿勢は強くないことがとらえられた。しかし、両親の部屋からの位置については、実態よりも遠い位置を希望するものが多く、その志向は前2者より強い。これは、家族から隔離したいのではなく、むしろプライバシーの要求ととらえられよう。

子ども部屋に対する不満について、図22に示す。全体的に過半数を超える強い不満がみられる項目はないが、「家具の種類」「部屋の広さ」「入り口の鍵の有無」に3~4割の子どもの不満がある。年齢段階別にみると、特に「入り口の鍵の有無」に違いがあり、中学生は子ども部屋に鍵を付けたいという要求を強く持っていることが明らかになった。これは、中学生の子ども部屋に対する不満の一番大きい部分ともなっている。また、「風通し」「日当たり」などの環境条件については、大学生の不満のほうが多い。

子ども部屋在室時の家族の出入りに対する要求について、図23に示す。全体的に、「ノックなど許可を得て入ってくるならよい」と考えている者が最も多いが、「入ってこないでほしい」と考える者も1割弱みられる。現在の実態と比べると許可を要求する者が多く、また大学生のほうが許可

を要求する者が多い。

子ども部屋の管理に対する希望について、図24に示す。現在の管理の実態と比べると、各項目とも自分でする希望が2割程度多くなっている。しかし、部屋の飾り付けや模様替えについては自分でするという意思が明確であるが、衣類の管理や掃除、ふとんのあげおろしなど日常的な家事に関わる部分については、中学生の場合親にすべてしてもらいたいと考える者がそれぞれ4割程度あり、親に子ども部屋の管理を依存する甘えの姿勢が顕著であるといえる。年齢段階別にみると、各項目ともその差が大きく、年齢とともに生活面の自立が進んでいるといえるが、大学生においても日常的な家事に関わる部分については親にも助けてもらいたいと考える者が2~3割あり、生活面の

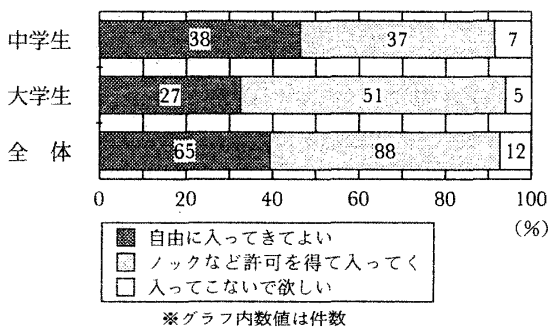


図23 在室時の家族の出入りについて

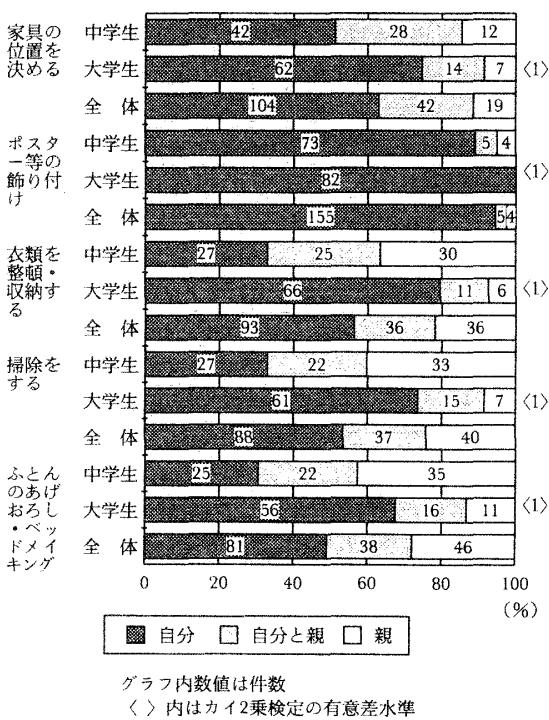


図24 子ども部屋の管理に対する希望

自立が確立しているとは言いがたい。

子ども部屋の使い方に対する希望について、図25に示す。全体的に、すべての項目について、使いたいと考える者は7割以上みられる。また、すべての項目で使用実態よりも希望の方が多くなっており、子ども部屋をより積極的に使おうとする姿勢がみられる。中でも、「テレビ・ビデオ」「友達を部屋に呼ぶ」「電話」の伸びが大きく、子ども部屋を「私的居場所」としてだけでなく、「公的居場所」としても使いたいと考えていることがとらえられた。年齢段階別にみると、実態の場合と同様に「友達を部屋に呼ぶ」以外の項目において、大学生の方が使いたいと考える者が多く、中でもプライバシーに関わる「私的居場所」につい

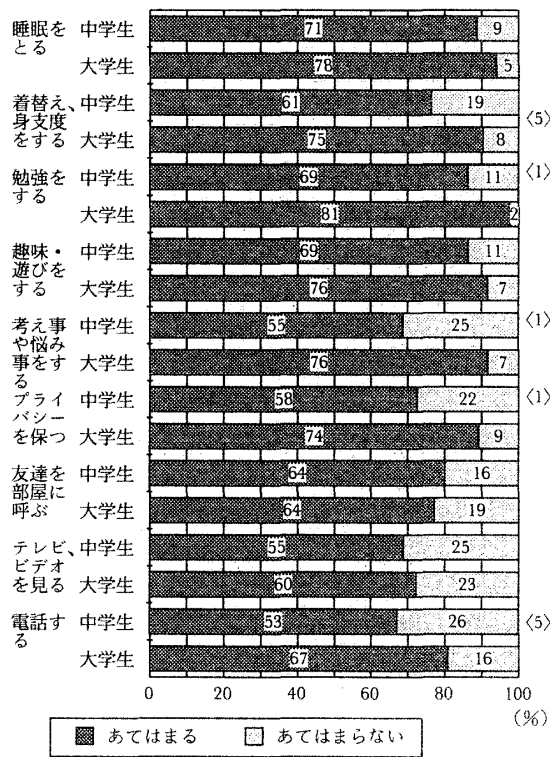


図25 子ども部屋の使い方に対する希望

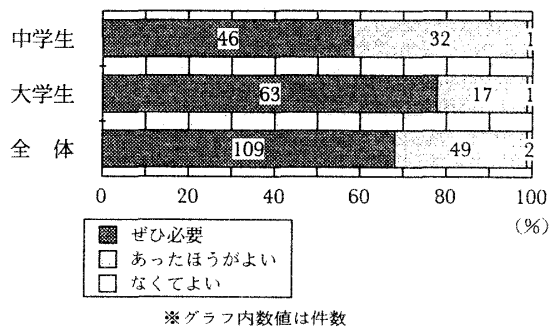


図26 子ども部屋の必要性の有無

て差が大きい。

子ども部屋の必要性評価について、図 26 に示す。「なくてよい」と考える者はほとんどないが、必要性の強さについて、年齢段階によって違いがあり、大学生のほうが「ぜひ必要」と考える者が多く、必要性意識が強いといえる。

子ども部屋をもつことによる変化について、図 27 に示す。全体的にみると、「落ち着ける場所ができた」「プライバシーが保てるようになった」「家庭での居心地がよくなった」などの「私的居

場所」の確立面をとらえる者が最も多く、次いで勉強、趣味に集中できること、さらに「自分のことは自分で決めるようになった」「自分の身の回りのことをするようになった」などの自立の側面をとらえている。逆に、会話、けんか、干渉を含めた家族とのコミュニケーション面に対する変化をとらえる者は少ない。年齢段階による違いをみると、「プライバシーが保てるようになった」「考え事をするようになった」などの精神的プライバシーに関わる部分や、「部屋に居る時間が長くなった」「勉強に集中できるようになった」などの部屋の活用度の面では大学生の方が変化を大きくとらえており、「自分のことは自分で決めるようになった」という自立面や、「家庭での居心地がよくなった」という「私的居場所」確立面、さらに「親とけんかすることが減った」「兄弟とけんかすることが減った」などの子ども部屋の逃避効果については中学生の方が変化を大きくとらえている。

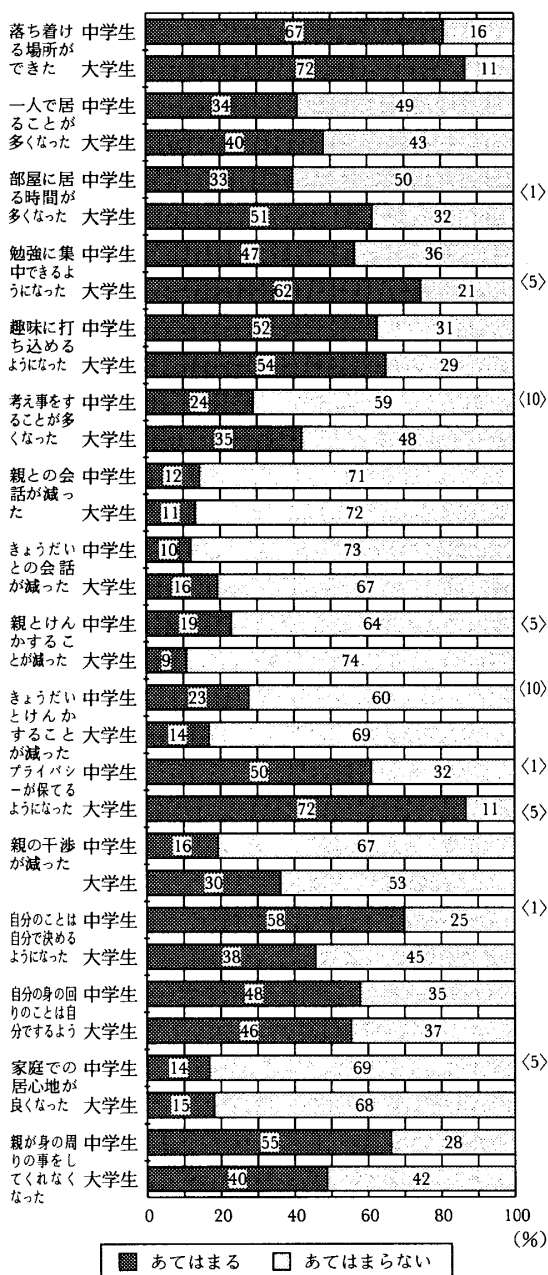


図27 子ども部屋を持つことによる生活の変化

4. おわりに

子どもの「私的居場所」の中心となる子ども部屋について、発達段階の比較検討を行うことにより、子ども部屋の「居場所」としての意味をとらえることを目的として、中学生と大学生に対して調査を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 子ども部屋の所有形態では、大学生の方が専用個室所有が高く、子ども部屋の位置についても、大学生の方が隔離度や独立性が高くなっており、よりプライバシーが守られやすくなっていることがとらえられた。
- 2) 子ども部屋の使い方において、大学生の方が活用度が高く、特に精神的プライバシーに関わる使い方を多く行っており、「私的居場所」としての意味も大きい。また、子ども部屋に配置されているモノや設備の面でも大学生の方が整っている。子ども部屋への人の出入りについては、中学生の方が開放度が高く、親の関与度が高い。子ども部屋の管理面においても、中学生の親に対する依存度は非常に高い。
- 3) 住宅全体の使い方において、大学生の方がより多くの行為を子ども部屋で行っており、普段よくいる部屋も子ども部屋であることが多いのに対し、中学生は居間にいることが多く相対的に、子

ども部屋の活用度は低い。

4) 一人になりたいと思う頻度や家族間のプライバシーの必要性について、大学生の方がより強くなっている。家庭が居心地がよいと感じている者は、中学生の方がやや少ない。好きな時間からみると、子どもは場所そのものよりもそこにいる人間関係の方を重視しており、子どもの「居場所」を左右する要因として、人間関係が大きいことがとらえられた。

5) 子ども部屋に対する意識についてみると、中学生は子ども部屋に対する不満の中で、鍵を付けたいという要求が最も多く大学生と比較してもかなり高くなっており、逃避・隔離要求が強いことがとらえられた。しかし、子ども部屋の管理要求では、特に日常的家事行為について親に依存したいという強い姿勢がみられる。子ども部屋の使い方希望からみると、両対象ともに「私的居場所」だけでなく、「公的居場所」としてもより子ども部屋を使いたいと考えていることがとらえられた。大学生の方が「私的居場所」要求が強いことも明らかになった。

6) 子ども部屋の必要性評価については、大学生の方が必要性意識が強い。また、子ども部屋をもつことによる変化についての評価では、両対象ともに「私的居場所」確立面の変化を感じている者が多いが、大学生の方にその傾向は強い。中学生では自立面や家族関係の側面の変化を大学生よりも強く感じており、子ども部屋の回避・回復効果の側面を評価していると考えられる。

その1~3、日本建築学会学術講演梗概集、1986年

同上 その1~3、日本建築学会学術講演梗概集、1987年

中島喜代子：「子ども部屋に関する研究」第1報、第2報、家政学雑誌、1986年、1988年

同上：「子ども部屋に関する研究」その1、その2、三重大学教育学部研究紀要、1993年、1994年

4) 例えば

古賀紀江ら：「高校生にとっての住まいの意味に関する考察」、日本建築学会学術講演梗概集、2001年

定行まり子ら：「中高生の生活と居場所に関する研究」その1、その2、日本建築学会学術講演梗概集、2000年

注

1) 例えば、

久田邦明編著：「子どもと若者の居場所」明文社、2000年

宮台真司・保坂展人・三沢直子：「居場所なき時代を生きる子どもたち」、学陽書房、1999年

田中治彦編著：「子ども・若者の居場所の構想」、学陽書房、2001年

2) 例えば、

竹下輝和ら：「子ども部屋に関する住文化論的考察」その1~8、日本建築学会大会学術講演梗概集、1983年~1986年

3) 例えば、

北浦かほら：「個室保有が子供の発達と家族生活に及ぼす影響」日米比較研究の予備的研究